

人口減少下のデトロイトにおける 都市農業の発展とその課題

二 村 太 郎

I はじめに

アメリカ合衆国（以下「合衆国」と略）の都市では、近隣の地域で生産された農産物や食品を消費することを奨励するローカルフード運動が1990年代から発展した。その結果、合衆国各地でファーマーズマーケット（農業者を主体とする定期市）が開催されるようになり、農業者と直接契約して農産物を定期的に購入するCommunity-Supported Agriculture (CSA) も増加傾向にある¹。肉食 (carnivore)、草食 (herbivore)、雑食 (omnivore) などの語を改変して、「ローカルな地域の農産物や食品だけを消費する人々」という意味を表す "locavore" という造語が今世紀に入って登場し、農や食と地域のつながりを強調する言説や様々なとりくみが合衆国社会で普及しつつある。半径100マイル以内の地域で生産された農産物と食品のみで一定期間生活するという試み (100 mile challenge) の実践もみられ、合衆国の隣国カナダ・ブリティッシュコロンビア州の小さな町で取り組まれたこの実験的活動を記録したドキュメンタリー番組が、2011年および2012年にNHK-BSで紹介された²。

このような流れが普及するに従い、合衆国では都市住民による農業実践に注目が集まるようになった。すなわち、空間的に近接した地域で生産された農産物や食品を消費することに満足するだけでなく、自らが農産物を生産していこうとする試みである。Backyard chicken と呼ばれる、自宅の裏庭で鶏を飼育して卵を得る活動はその一例といえよう³。元プロバスケットボール (NBA) 選手の Will Allen 氏が1993年にミルウォーキー市内の耕作放棄地を利用して農業を開始し、

-
- 1 二村太郎「ファーマーズマーケットからみたアメリカの地理」『新地理』58巻3号（2010年）、50-55.
 - 2 NHK「100マイル チャレンジ～地元の食材で暮らす～第1回 食べ物がなくなる?!」2014年10月5日アクセス。 <http://www.nhk.or.jp/wdoc/backnumber/detail/110801.html>.
 - 3 Jennifer Blecha and Helga Leitner, "Reimagining the Food System, the Economy, and Urban Life: New Urban Chicken-keepers in US Cities," *Urban Geography* 35, no. 1 (2014): 86-108.

持続的な食料生産と低所得者の生活やコミュニティ支援活動を実践するために立ちあげた団体 Growing Power が知られるようになるなど⁴、都市における農を関連させた諸実践は合衆国各地でみられるようになった。

都市農業とは、都市もしくは都市周辺地域で植物を育てたり動物を飼育したり、またそれに伴って生産された農産物や食料品を加工・販売することを指す。近年、大都市の屋上で実践されている養蜂もその一つといえる。都市農業は途上国において食料供給の重要な一部を担っていた一方で、合衆国ではどちらかといえばレクリエーションの一環として実施されてきた⁵。しかしながら、よりローカルな地域での農業生産を重視する社会的潮流に合わせて、都市農業の実践は近年拡大・増加傾向にある。とりわけ低所得者が多い地域での農業は、それ自体が食料供給の支援につながったり、雇用機会を生み出したりするなどの相乗効果をもたらすことが着目されている。⁶

とはいえ、都市で農業を営むことは、言葉で言うほど簡単なものではない。まず、農業を行うための土地へのアクセスの問題がある。人口が集中する都市ほど、空き地には宅地化や商業地への転用圧力がかかる。そのため、多くの大規模な都市では、都市農業といえば中心地に近いほど地上の平坦な空き地で行うものではなく、建物の屋上やテラスといった空間で行うものが一般的である。その結果として、都市農業は必然的に小規模な経営が主流となる。都市内部で生産される農産物はコメやトウモロコシなどの土地利用作物ではなく、野菜や花卉など面積あたりの収益率が高い品種が多くなる。消費地を近くに持つ利点を有効に活かして、顧客へ直接販売する直売型の生産・販売が中心となる。

本稿は、自動車産業の衰退とそれに伴う人口減少によって膨大な空き地が誕生したミシガン州デトロイトにおいて営まれている都市農業とその実践に着目し、その発展過程と課題について検討する。具体的には、都市農業の拡大をけん引してきた組織の活動と、市内各地に設立されているファーマーズマーケットに焦点を合わせて、それらが地域社会とどのように結び付いているのか、またデトロイトの都市農業が中長期的にどれだけ持続的なのか、現地調査により明らかにする。それを踏まえて、本稿では合衆国の都市で農業を行うことの意味を考えていく

4 Will Allen and Charles Wilson, *The Good Food Revolution: Growing Healthy Food, People and Communities* (New York: Gotham Books, 2012).

5 Lydia Oberholtzer, "Urban Agriculture," in *Encyclopedia of Organic, Sustainable, and Local Food*, ed. Leslie A. Duram (Santa Barbara, CA: Greenwood Press), 361-63.

6 Will Allen and Charles Wilson, *The Good Food Revolution: Growing Healthy Food, People and Communities* (New York: Gotham Books, 2012).

い。

なお、ここで取り上げる生産活動が農業と呼ぶに値するものなのか、あるいは単なる園芸（野菜や果物の栽培）作業の一部なのか、この点について考える必要がある。矢作（2012）は都市農業（urban agriculture）を都市農（urban farming）と区別して論じているが⁷、両者は生業とのかかわりの有無だけでは分類できないのではないかと筆者は考えている。国連食糧農業機関（FAO）は、都市農業（urban agriculture）は統計資料からなかなか認知されない生産活動であり、その背景には多くが非公式な活動ゆえに不可視であることが大きいということを指摘している⁸。しかし、政府機関が生産活動を認知しているか否かを問わず、食料を得るという行為は何らかの時間的拘束を含む労働を伴うものであり、生業と生産活動を厳密に区分することは難しいであろう。実際に栽培を行うための空き地があり、土壌の質が保証されれば、生産活動は十分可能である。そのため、本稿では一般に広く用いられている「農業」を agriculture と farming の両方の訳として用いる。

II 自動車都市デトロイトの衰退と変貌

1. デトロイトの盛衰

Henry Ford が T 型フォード車を開発して販売を開始したのは 1908 年である。彼はベルトコンベアーを利用して製造過程を流れ作業で進めるとともに、互換性をもつ標準化した部品を使用することで組立作業を単純化させ、非熟練労働者の従事を可能とした。これによって生産コストが大きく低下し、生産効率も上がったことで、後に「フォーディズム」と呼ばれるようになる大量生産方式を確立した⁹。フォードは自社の製品をより安く販売したことで顧客層を中間層へ広げていったとともに、労働者に支払う賃金を倍増させ、より多くの労働者が自動車を購入できるようにした。この結果、自動車の販売台数は増加の一途をたどり、フォードは莫大な収益を上げた。

自動車の大衆利用が普及すると、自動車での通勤を前提とした郊外住宅地が工

7 矢作弘「『緑のデトロイト』として再生を目指す—都市農／農業の展開」『地域開発』569号（2012年）、35-38。

8 Food and Agriculture Organization of the United Nation, “Urban Agriculture.” Accessed October 9, 2014. <http://www.fao.org/urban-agriculture/en/>.

9 榊原胖夫「経済成長の源泉」、地主敏樹・村山裕三・加藤一誠編『現代アメリカ経済論』（ミネルヴァ書房、2012年）、23-34。

場の周辺部に形成されていき、多くの労働者は都市中心部から郊外へ転居した。後発となるゼネラルモーターズ社とクライスラー社もフォード社と競いながら発展する中、自家用車は人々の主要な移動手段となり、デトロイトでは公共交通への投資が軽視されるようになった。市の中心部から放射線状に片側数車線分もある道路をくまなく郊外へ延伸・拡張させていったことで、市域を大幅に拡大させたデトロイト（図1）は自動車道路を基盤とした独特の都市景観を形成するようになった¹⁰。

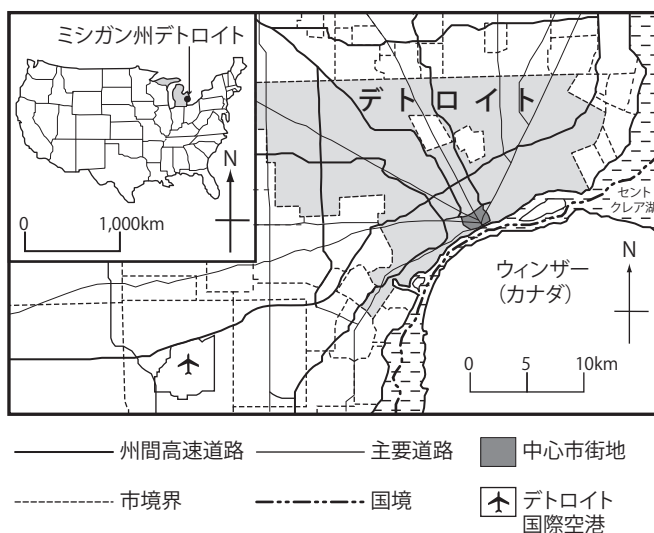


図1 デトロイト市の位置

第二次世界大戦の終了後、消費者による自動車の買い替えとともに自動車産業は再び発展したが、1950年代後半の景気後退を契機として、デトロイトは少しずつ衰退の道を歩み始めた。市域から郊外への人口移動が進むとともに、都市内部における人種差別と居住隔離が批判の対象となった¹¹。市政はダウンタウンの再開発事業などに取り組み経済再建を目指したものの、公民権運動の高揚する1960年代においてデトロイトは人種闘争の舞台ともなった。1967年に発生した暴動は43名の犠牲者と何百人もの負傷者を出しただけでなく、これまでデトロ

10 James Howard Kunstler, *The Geography of Nowhere: The Rise and Decline of America's Man-Made Landscape* (New York: Touchstone, 1993).

11 David Lee Poremba, *Detroit: A Motor City History* (Charleston, SC: Arcadia Publishing, 2001).

イトが抱えてきた貧困や対立の問題を全米に知らしめるきっかけとなった¹²。ベトナム戦争の長期化による経済不況やオイルショックの影響で、自動車産業は衰退を続け、それがデトロイトの経済にも深刻な影響を及ぼすようになる。

デトロイトの衰退は人口の変化で如実に表れ、その数は1970年代以降も減り続けた（図2）。1970年のセンサス調査時に151万人いたデトロイトの人口は減

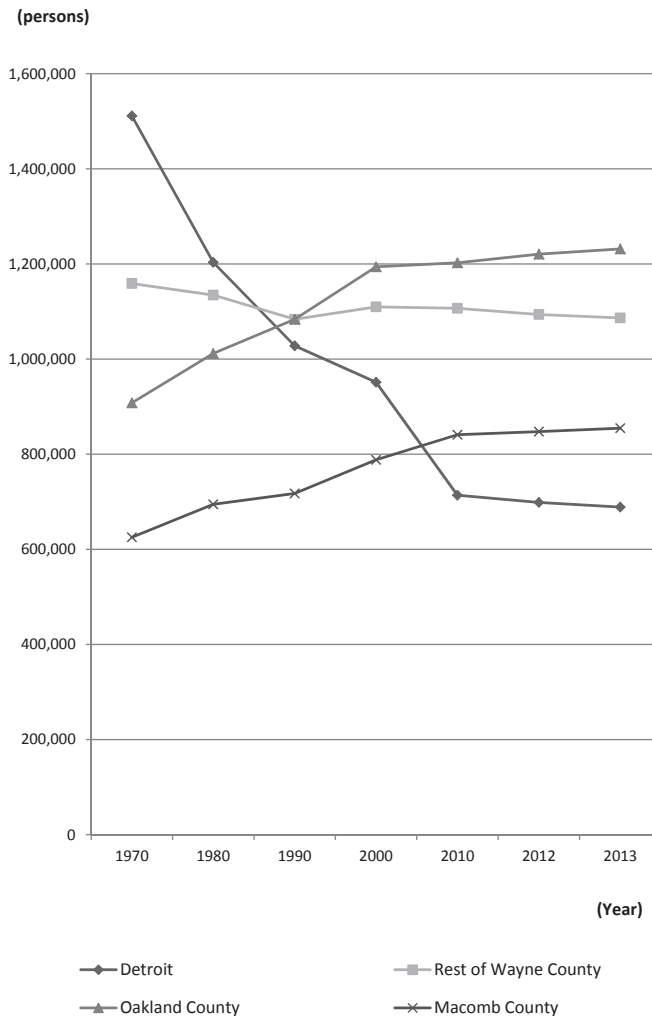


図2 デトロイト市と隣接郡の人口変化（1970-2013）

Source: U.S. Bureau of Census.

（注：2012年および2013年の数値は推計）

12 David Lee Poremba, *Detroit: A Motor City History* (Charleston, SC: Arcadia Publishing, 2001).

少の一途をたどり、そのペースは年月とともに鈍化したものの、1990年代には100万人都市の地位から転落した。隣接するオークランド郡とマカンプ郡の人口が同時期に少しずつ増加していったことと比べると、これらは極めて対照的である。また、デトロイトを含むウェイン郡におけるデトロイト市域外の人口を算出すると、その数は過去40年に微減で留まっており、どれだけデトロイトの市域のみ人口減少が進行したかが明らかである。1970年の時点でデトロイトの人口はミシガン州全体の約17%を占めていたが、2013年にその割合は約7%まで低下した。

デトロイトの人口減少は、景観的にもそれが顕著なものとなっている。Colasanti and Hamm (2010) はデトロイトの空き地を利用してどのくらいの青果物の生産が可能かを算出しているが、ここでは広大な空き地の分布図が例として示されている。自動車で市内を運転していると、住宅地を運転している途中で突然住宅がまばらになり、緑地が広がる場に遭遇することも珍しくない(図3)。それらの空間の多くは既存の家屋が長年放置されて劣化したか燃やされたままとなり、最終的に取り壊された建物が撤去された跡地が自然緑地となるのである。デトロイトの廃屋や閉鎖された工場の内部をカメラに収めた写真集の発売¹³は、デトロイトを廃墟の街として強く印象づけるものであった。



図3 デトロイト市内の閑散とした住宅地 (2014年9月9日 筆者撮影)

13 Andrew Moore, *Detroit Disassembled* (Akron, OH: Akron Art Museum, 2010).

デトロイトの市域内での人口減少が進むにつれて、様々な社会サービスの提供機会も減少するようになった。その中で一番大きなインパクトをもたらしたものが、スーパーマーケットを中心とした食品を販売する小売業の撤退である。デトロイトの人口減少の多くは中間層もしくは富裕層の転出によるものであり、低所得層の多くは市内に留まったままであった。犯罪が多発し、客単価が低い環境での営業は小売業者にとっても収益が望めず、多くのチェーンストアがデトロイト市内から撤退した。岩間(2011)はイギリスでみられるようになったフードデザート問題が日本でも着実に発生しつつあることを指摘したが¹⁴、これはアメリカでも例外でなかった。合衆国農務省は平均家族収入が地域の80%未満であるセンサス地区(低所得コミュニティ)で、なおかつ地区人口の33%以上もしくは500人以上がスーパーマーケットから1.6km以上離れたエリアに住んでいる空間(低アクセスコミュニティ)をフードデザートと定義しているが¹⁵、デトロイトはまさにその一つとして認定されている。デトロイト市内にあったスーパーマーケットは2007年に最後まで残った1店が撤退し¹⁶、その後の研究では地域住民の肥満問題が深刻化していることが指摘されている¹⁷。

2. フードデザート化を乗り越える試みとしての農業

食料品を販売するスーパーマーケットが皆無となったデトロイトでは、市内の住民に対する食料供給をどうするかという議論が展開された。自動車を有する住民は郊外まで食料品を買いに行くことができるが、低所得層の多くはその術を持たず、近隣のコンビニエンスストアや酒店が主な食料品の購入先となった。当然ながら、それらの店舗で売られている食品は割高であり、生鮮食品の種類も限られていた。

このような問題に対する解決策を模索する意味で、地域内で食料を供給する方策としてローカルフードが着目されるようになった。折しも、デトロイト市内に

14 岩間信之編著『フードデザート問題—無縁社会が生む「食の砂漠」』(農林統計協会, 2011年). 岩間はフードデザートを「直訳すると『食の砂漠』。まちなかでありながら食料品の確保が難しい、都市にぽっかりと空いた食の空白エリアを意味する」と説明している (p. i).

15 United States Department of Agriculture, "Food Desert." Accessed October 8, 2014. <http://apps.ams.usda.gov/fooddeserts/fooddeserts.aspx>.

16 Joel J. Smith and Nathan Hurst, "Grocery Closings Hit Detroit Hard: City Shoppers' Choices Dwindle as Last Big Chain Leaves," *Detroit News*, July 5, 2007.

17 Katarzyna Budzynska, Patricia West, Ruth T Savoy-Moore, Darlene Lindsey, Michael Winter and P. K. Newby, "A Food Desert in Detroit: Associations with Food Shopping and Eating Behaviours, Dietary Intakes and Obesity," *Public Health Nutrition* 16, no. 12 (2013): 2114-23.

立地するウェイン州立大学に勤める都市計画研究者の Kami Pothukuchi は早くからコミュニティレベルでの食料安全保障 (Community Food Security) の重要性を指摘しており¹⁸、都市内で食料生産を推進する議論がなされていた。彼女の働きかけが研究者の間でデトロイトに目を向ける大きな転機となっていたといえよう。

ただし、それ以外にデトロイトで何も行われていなかったわけではない。例えば、1989年に設立された環境系 NPO の Greening of Detroit は、デトロイトの人口減少とともに環境が悪化するなかで、植林を行い良質な緑地空間を形成する活動を行っていたが、後に空き地での農業を支援する活動を 2004年に始めた。具体的には、野菜の種子を大量に購入して育苗を行い、希望する住民へ安価で提供するというしくみである¹⁹。これについては次章で詳述する。また、1997年には Rick Samyn 氏が貧しい人たちへ食料を供給するスープキッチンを設置し、その過程で野菜栽培を行うようになった。彼は Earthworks という NPO を設立し、教会の近隣にある空き地を耕作していたが、ここでの生産が拡大するにつれて、2001年からは市内のファーマーズマーケットで余剰農産物を販売するようになった。Earthworks は 2008年に方針を変更し、スープキッチンへの食材提供に専念するようになり、生産された農産物のほとんどがスープキッチンで使われるようになった²⁰。ただし、毎週木曜日には少量の加工品と野菜および手芸品を敷地内の仮設店舗で販売している (表 1 の Meldrum Fresh Market)。

III 都市農業をめぐる様々な試み

デトロイトの都市農業を検討するうえでは、生産と消費の両面を見ていく必要がある。このうち、消費は個々の住民の生活様式によって大きく変化するため、数量的なデータが必要となり、限られた時間で全てを明らかにするのは難しい。そのため、ここでは 1) デトロイトの農業生産を支える組織的な枠組と、2) 農産物を販売する市場 (マーケット) の役割に焦点を合わせて論じていく。

18 Kami Pothukuchi (writer and editor), Hugh Joseph, Hannah Burton, Andy Fisher, and Kai Siedenburg (editor), *What's Cooking in Your Food System? A Guide to Community Food Assessment* (Venice, CA: Community Food Security Coalition, 2002). なお、この出版を支えた NPO 団体の Community Food Security Coalition は 2012年に解散した。

19 2014年9月3日に行った Lindsay Pielack 氏からの聞き取りによる。

20 矢作弘『『緑のデトロイト』として再生を目指す—都市農／農業の展開』『地域開発』569号 (2012年), 35-38.

1. 組織的枠組

デトロイトでは様々な団体が都市農業の支援に関わっているが、これらは一言でいえば非常にゆるやかなつながりで実践されていることが大きな特徴である。デトロイト市政府は財政難で積極的な予算配分を行うことができず、草の根組織が中心となって都市農業は発展していった。

デトロイトにおける農地の増加に大きく貢献したのが、先述の Greening of Detroit である²¹。2004年に同団体が開始した Garden Resource Program（以下 GRP と略）は、賛同する会員が年会費として数十ドル支払うかわりに希望する野菜の苗を貰うことができ、各自がそれらを自由に植えることができる。また、栽培に関する技術指導や教育活動も定期的に行っており、デトロイト中心部の付近には集約的な栽培技術を紹介するための農地も管理している（図4）。元々はコミュニティ支援の一環として始められた GRP は、広い意味で地域に根差した食料安全保障を意識しており、参加者に植物を育てることの楽しみを知ってもらう啓蒙的な目的も有していた。GRP の参加者は年々増え続け、2005年時点で80の菜園・会員が登録されていたが、10年も経たないうちにその数は15倍以上へ膨れ上がった。GRP の事業に専念するため、2013年に Greening of Detroit から



図4 デトロイト市内の都市農園（2014年9月3日 筆者撮影）

21 本節の内容は2014年9月3日に行った Lindsay Pielack 氏からの聞き取り調査を参考に構成している。

独立して Keep Growing Detroit という組織が新たに結成された。

GRP から支援を受ける人のニーズは様々であるが、多様な作物の栽培を経験して実績を積んだ者の中には、自ら生産した農産物を販売するようになった農業者もいる。このような農業者たちは Grown in Detroit という協同組合を結成し、後述するファーマーズマーケットで販売を行っている。Grown in Detroit のメンバーは約 90 名おり、分担しながら販売作業を行っている。筆者によるマーケットでの観察では、他の店舗よりもやや割高で販売していたが、接客が非常に丁寧で親しみやすく、自信を持って販売しているという印象を受けた。Grown in Detroit のメンバーが管理する農園は市内各地に点在しているため、必要に応じて新たに収穫したものをその日のうちに届けて販売することができるのが利点であるという。また、少数ではあるが、個人農家として独立した者もおり、ファーマーズマーケットでの販売やレストランへの納品で収入を得ている。

デトロイトにおける農業の多くは空き地となった土地を利用したもので、厳密に言えばそれらは不法占拠に当たるものであった。しかし、デトロイト市政府には廃屋を撤去したり新たな宅地造成に向けて空き地を整備したりする財政的余裕がなかったため、2013 年に新たな条例を制定して市民による農業活動を合法とする枠組みを作った。すなわち、市民が不動産を購入した際に、そこに隣接する土地が空き地であれば、買主が自らの管理で土地を使用しても良いというものであった。本来住宅地を管理するためのゾーニングに農業的土地利用の許可を組み入れたことで、市民の農業実践の道を拡大したのである²²。

Keep Growing Detroit は現在約 1400 人の会員数を有している。その内訳は家庭菜園、学校内の菜園、市場用菜園、コミュニティ菜園と様々であるが、どれも個人もしくは共同で管理しているものであり、機械を導入して大規模に生産しているものは皆無である。特筆すべきは、会員の管理する菜園の合計面積が約 140 エーカー（56 ヘクタール）に達していることである。2012 年の農業センサスによると、デトロイトがあるウェイン郡の販売農家の経営面積の中央値が 15 エーカーであることから、ウェイン郡の平均的な農家 15 戸がデトロイト市内で農業を営んでいるのと匹敵する規模である。GRP は今後も登録会員数が増加すると見込まれており、さらなる成長が期待される。

22 Richard Wooten, "Detroit's New Urban Agriculture Is a Good Start: Part I," *Michigan State University Extension News*, May 4, 2013. Accessed October 2, 2014.
http://msue.anr.msu.edu/news/detroits_new_urban_agriculture_is_a_good_start_part_i.

2. ファーマーズマーケットの存在

自家消費を超えるだけの量が生産されると、生産者には余剰品を販売する場が必要となる。他方で、新鮮な地元の農産物を求める消費者には、それらを購入できる場が必要である。ファーマーズマーケット (Farmers' Market, 以下FMと略) は生産者と消費者の両方の要求を満たす市として、合衆国で成長を続けてきた²³。

2014年現在、デトロイトには大小併せて11つのコミュニティFMと3つのファームスタンド(立ち売り販売所)がある(表1)。この中で一番大きなマーケットは、市民向けに火曜と土曜に開催されるEastern Marketである。1891年に開設したEastern Marketは、デトロイトの中心部から北西に進んだ台地上にある。ここは地域の中心的な市場として長らく君臨し、第二次世界大戦後に郊外でスーパーマーケットが増加したことで一時衰退傾向にあったものの、近年は周辺地域

表1 デトロイト市内のファーマーズマーケット (2014)

名前	営業日・時間	開催シーズン	販売品	出店者数
CHASS Mercado	木曜日 午前9時～午後1時	6/26-10/2	青果物、植物・花卉、加工食品	3～5
Downtown Farmers Market	木曜日 午前11時～午後4時	5/1-10/30	青果物、焼き菓子、飲料、持ち帰り用食品、工芸品	8～12
Eastern Market	火曜日 午前9時～午後3時 土曜日 午前6時～午後4時	火曜日 6/17-10/28 土曜日 年中無休	青果物、焼き菓子、飲料、パン、乳製品、肉類、植物・花卉、持ち帰り用食品、加工食品、工芸品	火曜日：50 土曜日：250
Highland Park Farmers Market	土曜日 午前10時～午後2時	7/12-10/4	青果物、焼き菓子、飲料、持ち帰り用食品、工芸品	5～7
Islandview Farmers Market	水曜日 午後4時～7時	7/2-10/15	青果物、焼き菓子、加工食品、工芸品	5～7
Northwest Detroit Farmers Market	木曜日 午後4時～8時	6/5-10/9	青果物、焼き菓子、飲料、パン、乳製品、肉類、植物・花卉、持ち帰り用食品、加工食品、工芸品	15～20
Oakland Ave Farmers Market	土曜日 午前11時～午後3時半	6/7-10/25	青果物、焼き菓子、植物・花卉	3～5
Peaches & Greens Store	火曜日～金曜日 午前10時～午後6時 土曜日 午前10時～午後2時	年中無休	青果物、飲料、乳製品、持ち帰り用食品	青果店
Sowing Seeds Growing Futures	火曜日 午後3時～7時	6/3-10/14	青果物、焼き菓子、飲料、持ち帰り用食品、加工食品、工芸品	10以上
Wayne State Farmers Market	水曜日 午前11時～午後4時	6/4-10/29	青果物、焼き菓子、飲料、パン、植物・花卉、持ち帰り用食品、加工食品	11～14
D-Town Farm Stand	土曜日 午前9時～正午 日曜日 午前10時～正午	6/7-9/28	青果物、飲料、加工食品	
Eastern Market Farm Stand	火曜日～土曜日 時間は設置場所により変化	6/24-10/4	青果物、飲料、加工食品	
Meldrum Fresh Market	木曜日 午前11時～午後2時	5/22-10/30	青果物、加工食品	

出典：2014 Detroit Community Markets Directory より作成。

23 二村太郎「ファーマーズマーケットからみたアメリカの地理」『新地理』58巻3号(2010年)、50-55.

で一番大きな青果物市場として、特に土曜日は多くの買い物客でにぎわう²⁴。4つの建造物から成るこのマーケットは、多くのFMと異なり屋内常設型マーケットであるため、悪天候の日もマーケットの開催が可能である(図4)。ダウンタウンに近い南側の建物では農業者自らが売りに来ている出店が多く(図5)、北側の建物で販売している大規模農家や専門業者と分けられている。この違いは陳列されている商品やその価格を見ると自明である。例をあげると、南側の出店者はブラックベリーを1ケース4ドル50セントで販売していたのに対して、北側の専門業者による販売品は1ケース2ドル程度であり、ケースにはカリフォルニア州の産地名が記載されていた。生産者のみが出店資格を有するという規範が合衆国のFMの主流になりつつあるなか、Eastern Marketは開始時から現在まで異なる時間帯に卸売と小売の両方を行ってきたことから、現在も生産者と専門業者の両方の出店を認めている。その点を考慮すると、Eastern Marketは純粹なFM(農業者のための市場)とは言い難い。

市内で開催されている他のFMに目を転じると、これらはいずれもEastern Marketに規模は遠く及ばないものの、曜日や時間帯をずらして開催することで(表1参照)、買い物客や出店者に利用しやすい形式をとっている。これらのFMはいずれも2008年以降にできたもので、発足以来同じ場所で運営しているもの



図5 デトロイトのEastern Market、外観(2014年8月30日 筆者撮影)

24 Randall Fogelman and Lisa E. Rush, *Detroit's Historic Eastern Market* (Charleston, SC: Arcadia Publishing, 2013).



図6 デトロイトの Eastern Market、内観（2014年8月30日 筆者撮影）

もあれば、移転して現在に至っているものもある。また、Wayne State FMのように大学生や教職員を主な購買者として展開するマーケットもあれば、Islandview FMやOakland FMのように管理する農地で生産されたものをすぐ横の空き地で販売し、地元住民と密着しているマーケットもある。後者は運営責任者が助成金を得ることで農地と生産量の拡大を実現させており、2013年に制定された条例を有効に利用しながら発展したといえよう²⁵。ここでは購買者の大半が低所得層であり、連邦政府やミシガン州政府が発行するFMで使用可能なクーポンを持参して買い物をする客も多い。

IV 都市農業の持続性をめぐる課題

前章までデトロイトの都市農業が歩んできた経緯とその主な特徴について述べてきたが、本章では現在の都市農業がどのような課題を抱えているかを検討していきたい。筆者がデトロイト市内のFMを回り、様々な出店者や運営者と話をしてきた過程で明らかになった問題として、大きく2点を挙げるができる。

1. 経済的持続性

協同組合を結成している Grown in Detroit の出店は Eastern Market と

25 2014年8月31日に行った Bill Hebron 氏からの聞き取りによる。

Wayne State FM の両方で見られるが、それ以外の場所での販売に向けても顧客獲得が求められている。GRP の会員で専業農家となっているのはごくわずかで、それ以外は兼業農家、もしくは市民農園での生産レベルにとどまっている。その背景として、会員が農業と別に仕事を持っているという例がほとんどだが、生産に使用する面積が少ないという問題もある。すなわち、いくら空き地が多く規模拡大が物理的には可能であるとしても、資金などの問題から、独立して販売していくだけの基盤を持つ農業者は非常に限られてしまうのが現状である。ミシガン州では許可を得た厨房以外（例えば自宅のキッチン）で加工した食品を販売しても良いとする Cottage Food Law と呼ばれる州法が2010年に制定され、これによってバーベキューソースやジャムの加工販売が付加価値商品として生産者の関心を集めたものの、その市場も頭打ちの状態となっている²⁶。現在 GRP の会員で農業生産に関心をもつ人や Grown in Detroit の組合員の活動が、如何にして現状から自立した生業に転換していけるかが、今後の大きな課題となる。

他方で、前述の2つ以外のマーケットは、どこも出店者不足で苦難している。表1にあるFMの一つは、年々出店者が減少し、その流れでFMに来る購買者も減少するという悪循環に陥っていることを課題として挙げていた。出店者としては満足いくだけの売上を得られる販売地を出店先として選択しがちなため、市内にFMが複数あっても実際には限られたFMでの出店に集約してしまう。購買者がいなくなるとはFMを運営し続けることが難しくなるため、出店者と顧客を同時に十分確保することのできるFMをどれだけ運営していけるかが重要になる。逆をいえば、いくら豊富に農産物が収穫できても、それを必要とする市民に供給する場がなくなるとは、デトロイトの都市農業は趣味の域を出ないままとなるであろう。

2. 労働力をめぐる問題

農作業は体力を要する活動である。片手間で行うと収穫量にも差が生じるため、日頃からのケアが欠かせない。また、人力で行う農作業には時間を必要とするため、手間がかかる作業が多い時ほど管理できる農地面積も限られてくる。とはいえ、専用の農業機械を導入するには機械の価格が高すぎるため、人力で農作業を続けていく間は規模を拡大することが困難である。

現地調査の中で聞いたことの中に、次のようなものがあった。「皆ローカルフードを食べることは好きだけど、農作業は嫌がる。」小規模な空き地が無数に点在

26 2014年9月9日に行った Micah Loucks 氏からの聞き取りによる。

するデトロイトにおいて、都市農業がさらに発展していくためには、小さな面積でも手間をかけて根気よく耕していかなければならない。しかしそれを誰がどこまで担っていくのだろうか。さらにいえば、コミュニティ農園も学校の農園も、ほとんどはボランティアで維持管理されているものである。そのため、ひとたび従事者がいなくなれば、農園は簡単に荒れた草地へと変貌する。実際、筆者が調査で現地を回っていた際に見かけた農園のなかには、明らかに管理が行き届いていないようなものもあった。

Severson (2008) はカリフォルニア州サンフランシスコ市内で自宅の敷地内に菜園を持つ Locavore が増えているものの、それを管理するために庭師が雇われている皮肉な状況を報じている²⁷。多額の資金を投じて機械化を進めることが難しいデトロイトの都市農業では、人力の農作業に頼らざるをえない状況である。市民の間で農作業の好き嫌いに個人差があるとしても、デトロイトの都市農業が今後も発展を続けていくことを目指すならば、安定した農業従事者・ボランティアを確保していくことが必要である。デトロイト市内のまとまった区画を新たに林野として開発する目的で参入した Hantz Farm 社が 2013 年から植林を行っているが (図 7)、今後それらを維持していくために移民労働者がデトロイトで従事することがあるとすれば、人口減少下のデトロイトでも本末転倒の動きといえよう。



図 7 デトロイトの北東部でみられた Hantz Farm の植林地 (2014 年 9 月 9 日 筆者撮影)

27 Kim Severson, "A Locally Grown Diet with Fuss but No Muss," *New York Times*, July 22, 2008. Accessed October 5, 2014. <http://www.nytimes.com/2008/07/22/dining/22local.html>.

V むすび

1950年代以降、デトロイトはマイナスなイメージでの語りに苛まれてきた。人種で隔離された住宅地、自動車産業の不振、暴動の発生とそれを恐れた白人の郊外への移転、貧困と犯罪、大小を問わない諸施設の廃墟化、市政府の破産……。それらのどれも誤りではないものの、基幹産業の不振と人口減少に伴う負の連鎖が合衆国のどの都市よりも消極的なイメージを貼りつけたといっても過言ではないだろう。

数多のマイナスイメージで語られてきたデトロイトは、今転機を迎えている。生活費とベンチャービジネスのスタートアップ費用が安く、娯楽施設も充実しているという理由で、ダウントウンは人口回帰が進んでいる。2014年8月には、毎週月曜夜にデトロイト市内をサイクリングツアーする企画を成功させた男性とそのグループが自転車で市内を回る様子が、アップル社の看板商品であるiPadの新商品の宣伝に利用された。1分前後のCMには、IIIで触れた都心部付近の農園もEastern Marketも登場する。3000人以上の参加者を集めるこの企画からは、市民の力でデトロイトを再興していこうとする意気込みが伝わってくる。実際、筆者の調査ではデトロイトの街について熱く語る人に何人も出会った。

2007年に市内からスーパーマーケットが消滅し、コミュニティの食料安全保障に危機感を抱いた人々の思いと共に、広大な空き地の有効利用を画策して都市農業が発展したデトロイトは、前述のCMの流れと一致するものがある。今まで合衆国のどの都市も実施したことのないような規模で都市農業が展開し、低所得層をはじめ地域の困っている人たちを助けていくために農園が活かされていくことは、広い意味での都市再興へ同じ方向を向いているように感じられる。矢作(2012)が論じるデトロイトの「反転の兆候」²⁸や、岡部(2013)が問う「切り札」としての都市農業²⁹も、同列に論じられる。Colasanti and Hamm(2010)が指摘するように、デトロイトの空き地を有効活用して人口の3割が消費する分の野菜を市内で生産できるようになれば³⁰、コミュニティの食料安全保障のあり方も大きく変化してくるだろう。それこそがデトロイトの大きな革命の一步となるに違い

28 矢作弘「縮小先端都市デトロイト—縮退の事情,そして反転の兆候」『地域開発』569号(2012年), 2-6.

29 岡部明子「都市縮小の先端を走るデトロイト最新事情(2)本格化する都市農業」『地域開発』585号(2013年), 48-52.

30 Kathryn J. A. Colasanti and Michael W. Hamm, "Assessing the Local Food Supply Capacity of Detroit, Michigan," *Journal of Agriculture, Food Systems, and Community Development* 1, no. 2 (2010): 41-58.

ない³¹。そしてそれはローカルフード運動が根付いてきた合衆国社会にとって重要な知見となるであろう。

しかし、デトロイトでローカルフードを求めれば求めるほど、その供給にはより大きな困難が今後生じるかもしれない。空き地を転用する形で生まれた農業用地も増え、GRPの参加者増加で農業への関心も高まっているものの、それを担う人がどれだけ出てくるのかが大きな課題となる。デトロイトの都市農業の発展に大きく貢献したNPO組織のGreening of DetroitもKeep Growing Detroitもアウトリーチと教育を重要なテーマの一つとして挙げていたが、今後誰がどのようにその活動を担っていくのか、また人口減少が進む中でどのように活動を維持していくのか、検討すべき課題は山積している。かつて製造業を中心として栄えた合衆国東部の人口減少傾向の都市のいくつかでは、デトロイトにおける都市農業の実践を都市開発のモデルとして導入したという³²。合衆国の様々な都市が都市農業をどのように導入し、誰がそれらを中長期的に持続していくのか、またその過程で生産者と消費者をむすぶFMはどのような役割を担っていくのか。これらについては、今後の研究で明らかにしていきたい。

31 John Gallagher, *Revolution Detroit: Strategies for Urban Reinvention* (Detroit, MI: Wayne State University Press, 2013).

32 2014年9月3日に行ったLindsay Pielack氏からの聞き取りによる。

本研究は「農・食・地域をつなぐ空間—アメリカ合衆国ファーマーズマーケットの持続可能性」(科学研究費補助金若手研究(B)課題番号25870897)の成果の一部である。

ABSTRACT

Growth of Urban Agriculture in Detroit, Michigan and Its Future Challenges

Taro Futamura

As the local food movement—emphasizing producing and consuming locally-grown food—diffused nationwide in the United States, the number of outlets where people can purchase “local food” has increased substantially. This is particularly the case in cities, and the number of farmers’ markets has increased dramatically. More and more people are interested in food and produce that are produced locally, and discussions of adopting local food in everyday life are frequently found in media. In addition, there is rising interest in growing food on one’s own, and some people have committed to developing their backyard gardens or some shared space for community gardens. It must be understood, however, that urban spaces tend to be influenced by pressures for development, and land upon which to grow food is usually limited.

One exceptional model that is developing is urban agriculture in Detroit, Michigan. After the decline of the automobile industry and as working class families shifted to the suburbs, the total population of Detroit began to decrease significantly since the 1950s. With enormous vacant lots available throughout the city as well as the decrease of grocery stores, some leaders of community groups began to adopt farming in Detroit. This paper examines the growth of Detroit’s urban agriculture as well as future challenges.

This paper points out three things. First, the development of urban agriculture did not come out of Detroit’s urban policy, but instead from multiple programs offered by non-profit organizations. In particular, Garden Resource Program (GRP) offered diverse residents and communities’ access to planting and growing vegetables and fruits as well as receiving technical assistance. GRP contributed to a spatial expansion of urban gardens in Detroit. Currently Detroit is estimated to have approximately 140 acres of land in Detroit.

Second, the number of locally-held farmers' markets grew in accordance with urban gardens. Those who developed skills with GRP formed a cooperative, "Grown in Detroit," to sell their produce at farmers markets. While Eastern Market in central city continues to be the biggest produce market in Detroit, a number of growers began to sell not only at Eastern Market but also at community farmers markets. This provided an opportunity for consumers to purchase produce that is truly grown in Detroit.

Third, while the size of urban gardens continues to increase, this paper questions the sustainability of its growth because of labor availability concerns. Many small farmers' market managers point out the difficulty of attracting vendors, who tend to sell at bigger markets. Many growers who want to expand the scale of production also lack enough labor power. Thus, while citizens understand and support urban agriculture in Detroit, whether it is feasible to "Feed Detroiters" seems questionable.

